

研究旅行奨励制度レポート 2008 8/28～9/4

幾何学であふれる花の都パリ



フランス文化コース

安倍 裕希

はじめに

私は今回の研究旅行奨励制度で、昨年より個人で研究しているジョルジュ＝ウジューヌ・オスマンによる第二帝政期の都市改造計画(1852年～1870年)によって造られたパリの街と、今年度演習の授業で読み進めている「URBANISME」の著者であり、オスマンの改造計画を称賛し自らもパリの改造計画を考えたル・コルビュジエの建築物を、自分の目で直接見て歩くことによりその関連性や特徴を調べ、なにより自分たちが日々書面や写真や映像で研究を進めるものを肌で感じてその存在を実感し、より理解を深めるためパリへ向かうことにした。

幾何学

私は書物等でコルビュジエと都市改造計画を行ったオスマンをみていくなかで、両者の共通点は、直線や碁盤目など幾何学的なものを評価し、これを実際に建築物や街路等で取り入れている点だと考えた。そこでフランスに行き、パリの街やコルビュジエの建築物を実際に自分の目で見る際に幾何学的面に特に注目して見てみることにした。

パリに着くとそこは自分の慣れ親しんだ日本の世界とは全くの別世界であった。「花の都」人々がそう呼ぶパリはどの建物からも歴史の古さを感じることができるとも素敵な街だった。パリの街を歩きながら自分の目で見てみると、そこには直線の街路、左右対称の建物、真っ直ぐ整然と並んだ木々のある庭園など幾何学があふれたところだった。

シテ島

まずシテ島に行ってみるとそこは計画的に整備され、まっすぐな道が通り、重要な公的施設が立ち並ぶ場所であった。パリの水源セーヌ川に浮かぶシテ島は、城壁を拡張することで広がっていったパリの中心である。シテ島はパリの中心として交通循環の要でありながら、かつては隘路が走り、交通渋滞を悪化させていた。そこでオスマンの改造計画によって最高裁判所や兵営(現、警視庁)などの公共施設が整備され、新しい街路がつけられた。パレ大通りが南北に走ることでパリの右岸のセバストポール大通りと左岸のサン・ミシェル大通りを一直線に繋げた。実際にパレ大通りに行ってみると交通量も多く、自動車や自転車などに乗ってたくさんの人々が行き交っており交通の要所ということがよくわかった。ここがもし改造される前の状態だったとしたら、現在のパリのような交通網は成り立たないのではないだろうか。

ルーヴル美術館

ルーヴル美術館に行ったらその大きさや収蔵品の多さに誰もが驚くだろう。ルーヴル美術館はかつてパリの街の城壁の一部であった。1190年当時の国王フィリップ2世によって要塞としてルーヴル城が建てられ、それからヴァロア朝の時代に当時の国王シャルル5世によって、国王の住まいとして作り替えられ王宮となる。しかしヴェルサイユ宮殿が建設され、ルーヴル王宮ではなくなり、

フランス革命後ルーヴルは美術館となる。ほぼ現在の姿のルーヴル美術館が建てられたのも第二帝政期である。当時はルーヴルの近くにあったチュイルリー宮殿とルーヴルとをつなぐ建物が建設された。これらは当時の大臣や高官達の名前をとって「リシュリューパヴィリオン」「ドノンパヴィリオン」「シュリーパヴィリオン」と呼ばれ現在もこの名で親しまれている。この後 1870 年に起こったパリ民衆蜂起によってチュイルリー宮殿は焼かれ。ルーヴル側が残り現在のルーヴル美術館になった。ルーヴル全体をみると、まず正方形の庭クール・カレの周りを囲むようにしてできたシュリーパヴィリオンとルーヴルからチュイルリー公園側に真っ直ぐのび、南北に対称的な形状で建てられているリシュリューパヴィリオンとドノンパヴィリオン、そしてルーヴルの外と中に造られたガラスのピラミッドで構成されている。これらのどの部分をもみても幾何学的であった。

オペラ・ガルニエ

世界的にその名を知られるオペラ・ガルニエも第二帝政期にパリ改造の一環として建設された。当時無名の建築家であったシャルル・ガルニエによってデザインされたオペラは古典からバロックまで様々な建築様式が混じり合った豪華絢爛な建物となっている。朱色で統一された座席の真上には青、赤、黄、緑などの様々な色で描かれたシャガールの大作『夢の花束』が目を引き。オペラ・ガルニエはその建物自体も素晴らしいがもうひとつ大切な役割がある。それはロータリーの中心である。オペラ・ガルニエがつくられた際に同時につくられたのがオペラ・ガルニエ正面からアンドレ・マルロー広場まで一直線に延びる全長約 700 メートルのオペラ大通り(旧ナポレオン通り)である。またオペラ・ガルニエは四本の小道によって囲まれ、後方にはオスマン大通りが走っており、オペラ・ガルニエ全体がロータリーのような役割を果たしている。実際に行ってみると、確かにオペラ・ガルニエの周りには交通量の多い街路が走り、交通網のロータリーとなっていた。しかし周りにそのような街路が走るによりオペラ・ガルニエが周囲から孤立していうように思えた。

アンドレ・マルロー広場側からオペラ大通りを通してオペラ・ガルニエの方向を見てみると、周りの建物の高さが統一されていて真っ直ぐに通りにそって立ち並び、その一番奥にオペラ・ガルニエ



の正面が見えるようになっていて。この辺りがまるでひとつの芸術作品のようにみえた。ここにも幾何学を発見することができた。



オペラ・ガルニエ



↑ サヴォア邸

されたピロティーがあった。中に入ってみると、有名な「近代建築の五原則」の一つである横長の連続窓があり、屋上庭園や螺旋階段など今まで書物の字で見てきたものを実際に見ることができ感動した。またここでも水平な連続窓や長方形の壁面など、やはり幾何学的な部分を発見することができた。サヴォア邸は「住宅は住むための機械」と評したコルビュジエの作品だけあって、とても機能的につくられているように思えた。とても機能的でシンプルですばらしい作品だと思うが、住宅ということを考えると私にはなぜかは違う感じがした。私の中で家と言えば木材とかレンガとか瓦などが使われていて、屋根が斜めに傾いていて、もっといろいろなものが乱雑に入り混じって雑然としているイメージであった。それに比べてサヴォア邸はとても統一感があり家というより一つの作品に思えた。

パリの16区にその他の建物とはやはり違う様相で建つのがコルビュジエのアトリエのあるアパートだ。ここは生涯絵を描き続けたコルビュジエの画家アトリエで入口入ってすぐのエントランスの壁にはコルビュジエの絵が一面にあった。中に入るとこぢんまりとした広さの中に螺旋階段や水平な連続などやはりコルビュジエの特徴的なものが多々あった。このアパートからはパリの町がみわたすことができ、コルビュジエも見ていた景色を現在でもあまり変化することなく私に見せてくれるパリの街のすごさを感じた。

サヴォア邸 コルビュジエのアトリエのあるアパート

コルビュジエの傑作サヴォア邸はポワッシーというパリ郊外のやや古風な住宅街に突如として建っていた。空の青に大地の緑の中心に白く輝くサヴォア邸は今までこの研究旅行で見てきた建造物とは明らかに全く異なる建築物であった。長方形の壁の下には細い柱が何本も立って作り出



↑ 螺旋階段(サヴォア邸)



チュイルリー公園 ↑

コルビジエのアトリエのあるアパートのエントランス ⇨



庭園公園

パリの街を歩いているとあちこちに公園や庭園、芝生、木々など様々な緑地を発見することができた。私が長年住む福岡の街に比べてパリは緑地の面積が多くて、そのようなところも素敵だと思った。休日の日には芝生に寝転んだりお弁当を食べていたり、公園でサッカーなどのスポーツをして遊んだりする人々がたくさんいた。そんなパリの人々の憩いの場である公園を見ていて気付いたのはここでも幾何学が使われていることである。

アレクサンドル三世橋近くにある芝生は街路に沿って長方形に敷かれていた。またエッフェル塔から見下ろしたシャン・ド・マルス公園は直線的で左右対称的だった。直線的といえばオーランジュリー博物館やルーヴル美術館の近くにあるチュイルリー公園だ。ここは木々がまっすぐに並び左右対称的だ。この公園の設計者はヴェルサイユ宮殿の造園で知られるル・ノートルである。ヴェルサイユの庭園も直線的で対称的である。これらの公園庭園は直線的パースペクティブが特徴のフランス的庭園である。

これに対して第二帝政期に整備されたビュット＝ショーモン公園やモンソー公園やモンスリー公園は川や橋、池などがあり、特に幾何学的ではないイギリス式庭園である。イギリス式庭園は幾何学的なフランス式庭園とは違って、人工でつくられた

⇩ モンスリー公園

ものではあるがどこか自然的な感じがした。モンスリー公園を散歩している老人を見ていて、このようなイギリス式の公園を自然とふれあいながら散歩することは、整然と幾何学的に造られたフランス式の公園を散歩するのとはまた違って、幾何学であふれるパリの街の中の癒しのように感じた。



まとめ

これまで様々なものをパリで見えてきて、パリの街は様々な幾何学的なものであふれて、とても機能的で統一感があり、そのおかげでこうして第二帝政期の大改造から百年以上たった今でもあまり変化せず当時の状態をとどめていることに素晴らしさを感じた。

しかし人々が生活していくうえで幾何学だけでなく、自然に作り出された木々や古くからあり曲がった道なども必要であると思う。科学だけでなく自然的なものが必要なと同じであるように感じた。

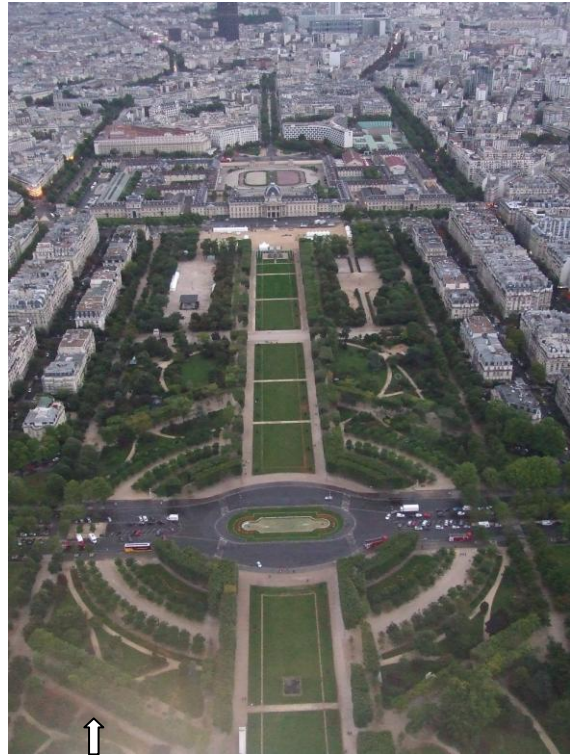
今まで私はオスマンによる第二帝政期の都市改造計画の研究や、授業でコルビュジエの「URBANISME」読み進めている中で、幾何学についてとても機能的で素晴らしいと考えていたが、

シャン・ド・マルス公園

今回実際パリに行くことができ、また違う考え方もあることに気付かされた。

「百聞は一見にしかず」という言葉があるように、この研究旅行でやはり自分の足で歩いて様々なものを自分の目で直接見ることができることは、何よりも勉強になると思った。この研究旅行に参加できたことは今後の為に本当に良かったと思う。

↓ サヴォア邸 連続水平窓



参考文献

- フランス第二帝政下のパリ都市改造
/ 松井道昭著
パリ大改造：オスマンの業績
/ Saalman, Howard., 小沢明
フランス・スペイン・ポルトガル
/ 羽生修二, 入江正之, 西山マルセー編
(世界の建築・街並みガイド ; 1)

要項

私はフランスに行って個人で研究しているオスマンの都市改造計画で整備建設されたパリの街や演習の授業で読み進めている「URBANISME」の著者ル・コルビジエの建築物を見てきました。またルーヴルやオルセーをはじめとした様々な美術館に行って、今まで教科書の中で見てきた様々な絵画の現物を間近で見えてきました。今まで研究していたものや書物や映像で見てきたものを実際に見ることができとても感動しました。実際に見てみると想像していたものとは違ったりして驚かされたり、間近で見ることでまた新しい発見をしたりすることができました。

私にとって今回は初めてのヨーロッパ旅行で、また個人で行くのは初めての海外旅行でしたので、飛行機に乗るにも、パリで地下鉄に乗るにも戸惑うことばかりでした。また言葉もフランス語なので、大学で勉強していたのですが、放送を聞き取ったり会話したりするのは一苦労でした。しかしこのような現地を訪れてしか味わえないことをも身をもって体験し勉強することができました。

今回フランスを訪れることができて本当に良かったと思います。